

1 はじめに

ロシア軍が2022年2月24日、ウクライナに軍事侵攻しました。、軍事施設だけでなく民間施設や住宅、学校、病院までもが攻撃され、安全を求めてポーランド、スロバキア、ハンガリーなど隣国へ避難した人は1100万人以上（8月30日現在：国連高等弁務官事務所）に上ります。

ロシアとウクライナの間で急速に軍事的緊張が高まったのは2021年の秋以降です。まずロシア西部、ウクライナ東部国境付近に約9万人のロシア軍が集結していることが発覚します。ロシア軍は年明け早々にも最大17万5千人規模でウクライナに侵攻する計画だ、というアメリカ情報機関の分析が報じられたのは12月はじめでした。22年2月に入ると、ロシア軍はウクライナ北部と国境を接するベラルーシ国内でベラルーシ軍と合同軍事演習を始めます。南の黒海ではロシア海軍の大規模な演習が行われていて、ウクライナは北・東・南の3方向から包囲される形になりました。そして24日、ついにロシアによる侵略戦争が始まりました。一体なぜこんなことが起きたのでしょうか。気に入らないことがあるからといってよその国を勝手に攻撃していいはずがありません。このレポートではウクライナがどういう国なのか、ロシアとウクライナがどのような関係にあるのなどを高等学校の授業で使用する地理や歴史の教科書・地図帳・資料集の内容を用い紹介し、各先生方でなぜこの戦争が始まることになったのかを考えていただきたい。

2 地理関係資料より

(1) 地図帳（帝国書院）世界の国別統計から

			人 口 (万人)	面 積 (千 km)	人口密度 (人/km ²)
4	アンドラ公国	アンドララベリャ	7	0.5	155
5	イタリア共和国	ローマ	6,066	302	201
6	ウクライナ	キエフ	4,259	604	71
7	エストニア共和国	タリン	131	45	29
8	オーストリア共和国	ウィーン	869	84	104
9	オランダ王国	アムステルダム	1,697	42	409
10	ギリシャ共和国	アテネ	1,078	132	82
11	グレートブリテン及び北アイルランド連合王国	ロンドン	6,538	242	270
12	クロアチア共和国	ザグレブ	419	57	74
13	コソボ共和国	プリシュティナ	178	11	164
14	サンマリノ共和国	サンマリノ	3	0.06	557
15	スイス連邦	ベルン	832	41	202

産業別人口割合 非識字率
第1次 第2次 第3次 老人率 男 女

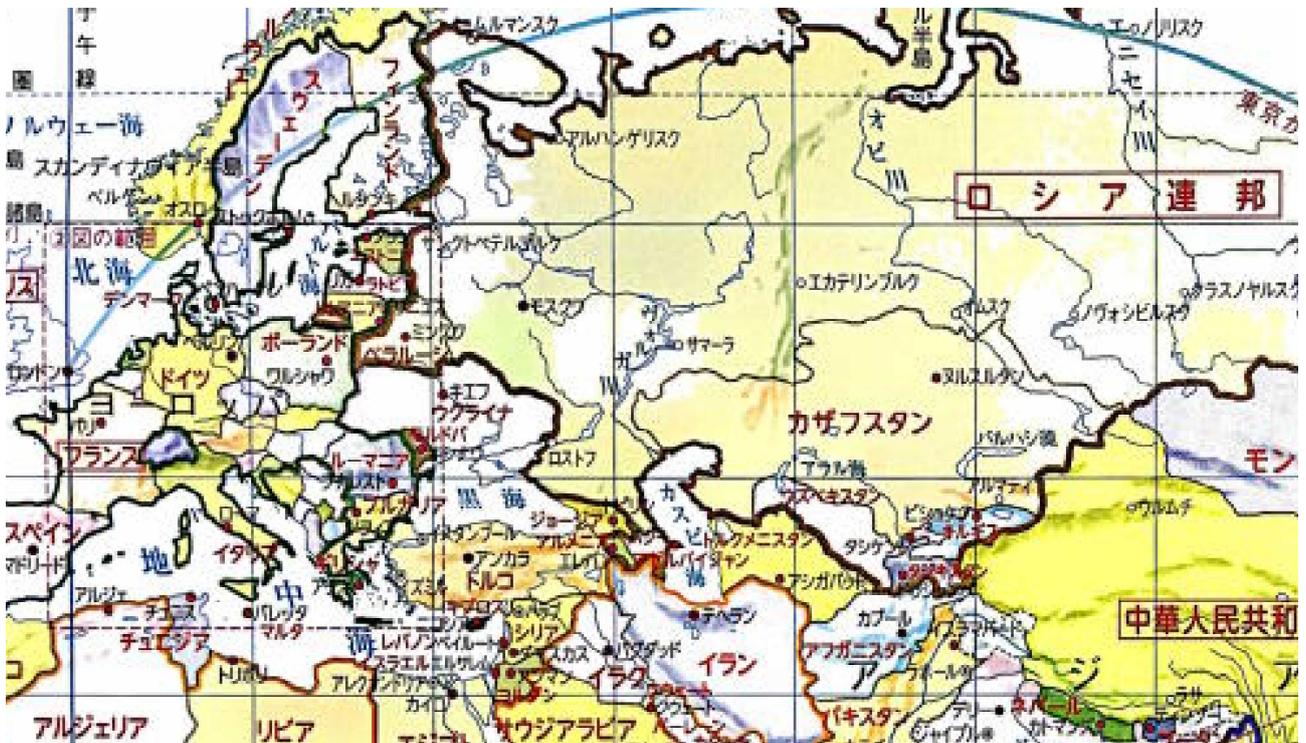
4	アンドラ公国	—	—	—	12) 12.6	—
5	イタリア共和国	3.9	26.1	70.0	22.7	0.6/1.0
6	ウクライナ	15) 15.3	24.7	60.0	15.6	0.2/0.3
7	エストニア共和国	3.9	29.6	66.5	19.0	0.2/0.2
8	オーストリア共和国	4.4	25.6	70.0	18.9	—
9	オランダ王国	2.1	15.1	82.8	18.7	—
10	ギリシャ共和国	12.4	15.2	72.4	21.6	1.5/3.1
11	グレートブリテン及び北アイルランド連合王国	1.1	18.4	80.5	18.0	—
12	クロアチア共和国	7.6	26.9	65.5	19.3	0.3/1.1
13	コソボ共和国	4.2	29.6	66.2	15) 6.8	—
14	サンマリノ共和国	0.3	32.8	66.9	15) 18.4	—
15	スイス連邦	3.3	20.1	76.6	18.3	—

二酸化炭素 1人あたりの 穀物 エネルギー
 排出量 森林給 国民総所得 自給率 自給率

4	アンドラ公国	6.4	34.0	13) 40,650	—	—
5	イタリア共和国	⑤5.3	31.6	31,590	69	24
6	ウクライナ	5.2	16.7	2,310	194	68
7	エストニア共和国	14.1	52.7	17,750	141	104
8	オーストリア共和国	7.1	46.9	45,230	93	37
9	オランダ王国	8.8	11.2	46,310	16	64
10	ギリシャ共和国	6.0	31.5	18,960	85	37
11	グレートブリテン及び北アイルランド連合王国	6.3	13.0	42,390	86	66
12	クロアチア共和国	3.6	34.3	12,110	113	52
13	コソボ共和国	4.1	—	3,850	—	72
14	サンマリノ共和国	—	0.0	08) 51,810	—	—
15	スイス連邦	4.6	31.7	81,240	42	50

(2) 地図帳（帝国書院）世界の国々から

ウクライナはロシアの隣、東ヨーロッパとよばれる地域にあります。



(3) 資料集 (第一学習社) ロシアと周辺諸国の農業から

ロシアと周辺諸国の最も重要な農業地域は、ウクライナからシベリアの南西部にのびる黒土（チェルノーゼム）地帯で、小麦栽培を中心とする世界有数の穀倉地帯となっている。（説明文より）



④小麦の収穫(ウクライナ) ロシア革命後、土地や農民は**コルホーズ**(集団農場)や**ソフホーズ**(国営農場)に集団化・国有化され、高度機械化・大規模経営化されたが、地力低下・天候不順・労働意欲の低下などから、1970年代より恒常的かつ大量の穀物輸入国となった。ウクライナ南部には肥沃な黒土(チェルノーゼム)が広がり、小麦栽培が盛んである。「ヨーロッパのパンかご」と呼ばれ、ソ連時代の1980年代後半には全生産量の約1/4を生産していた(ロシアが約1/2)。ロシアは世界有数の小麦輸出国だが、低品質のため発展途上国や新興国が主な輸出先である。[リンク](#) p.37, 60

ウクライナの国旗と農業・気候

気候は南部はステップ気候＝乾燥帯で晴れた日が多い、水色はその青空を表す

国旗

水色(晴天の青空)
黄色(黄金色の小麦)

ウクライナ南部は雨が少ないステップ気候＝世界的な農業地帯であることを表している(黄色は麦・ヒマワリを表す)特に現在ロシアが実効支配している東部がその地域にあたる

(4) 資料集 (第一学習社) 世界の気候から



南部はステップ気候区である



④ **チェルノーゼムの小麦畑**(ウクライナ) ウクライナから西シベリア南部にかけて広がる黒土地帯は、世界的な穀倉地帯の1つとして知られる。ロシア語で黒土を意味する**チェルノーゼム**は、厚い腐植層を持つ肥沃な土壤で、小麦をはじめ、トウモロコシ・ジャガイモ・亜麻・テンサイ・ヒマワリなど各種作物の生産が盛んである。

(4) 資料集 (第一学習社) ロシアとその周辺の鉱工業から



現在ロシアが実効支配している東部「ドネツク地方」にはドネツ炭田があり、下の鉄鉱石と合わせて重要な資源である。

この地域が原料産地となるため、ロシアに攻撃された製鉄所はこのドネツク地方に立地している。



93 鉄鉱石の産出と埋蔵量

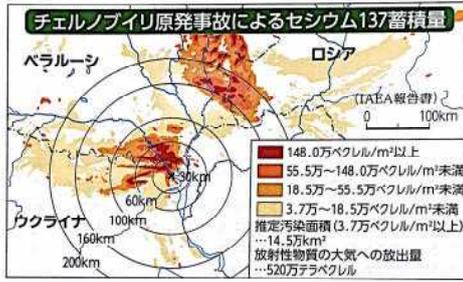
	2018年	万 t	%	埋蔵量(億 t)
1	オーストラリア	55 743	36.7	230
2	ブラジル	29 278	19.3	150
3	中国	20 931	13.8	69
4	インド	12 600	8.3	34
5	ロシア	5 670	3.7	140
6	南アフリカ共和国	4 720	3.1	—
7	ウクライナ	3 770	2.5	23
8	カナダ	3 150	2.1	23
9	アメリカ	3 130	2.1	—
10	イラン	2 390	1.6	15
11	スウェーデン	2 220	1.5	—
12	メキシコ	1 402	0.9	—
	世界計	152 000	100.0	810

(5) 資料集 (第一学習社) 原発事故とその影響から

1 原発事故とその影響

リンク p.49

① **チェルノブイリ原発事故** 1986年4月26日深夜、旧ソ連ウクライナ共和国のチェルノブイリ原発4号機が、運転上の問題に発電所の構造上の欠陥が重なって爆発、炎上した。放射性物質は風に乗って拡散し、ヨーロッパを中心に世界各地を広範囲に汚染した。周辺地域では甲状腺ガンや白血病による死者を出した。現在でも病気や後遺症に苦しむ人々が多く見られる。

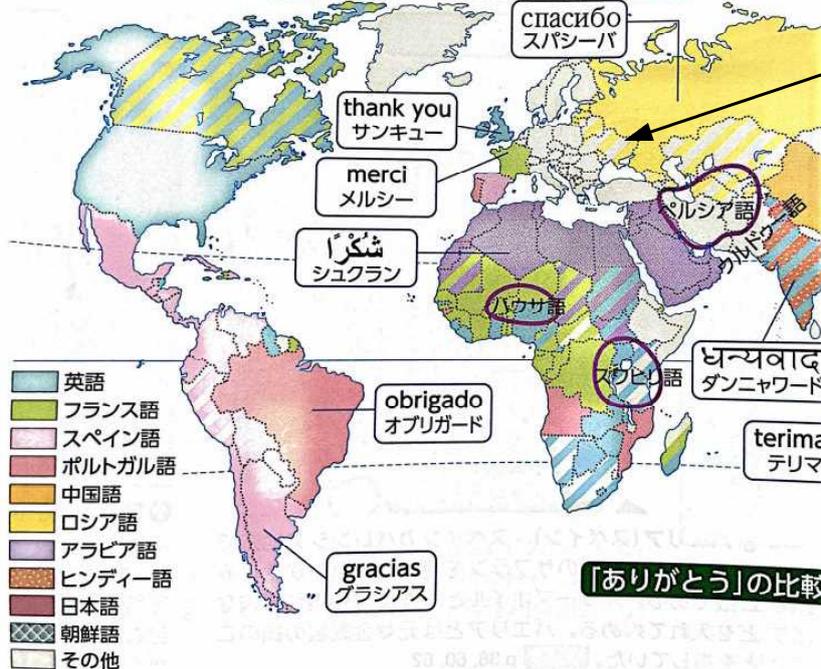


② 事故後のチェルノブイリ原子力発電所 (ウクライナ)

(6) 資料集 (第一学習社) 世界の主要言語から

といわれ、狩猟や採集生

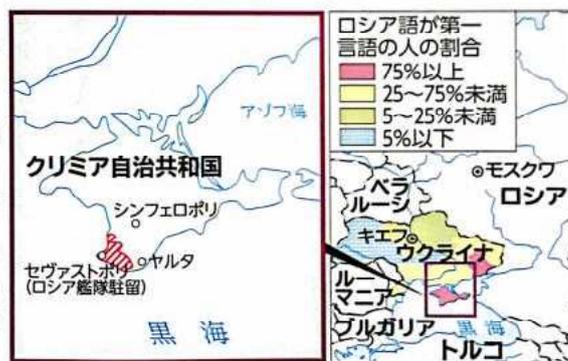
2 世界の主要言語 リンク p.159, 169, 17



ウクライナにはロシア語を話すロシア人も居住している

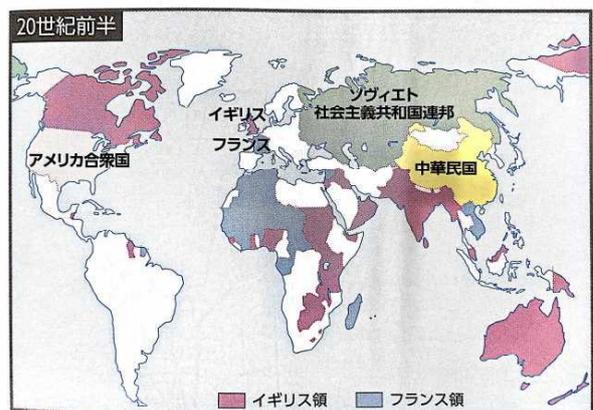
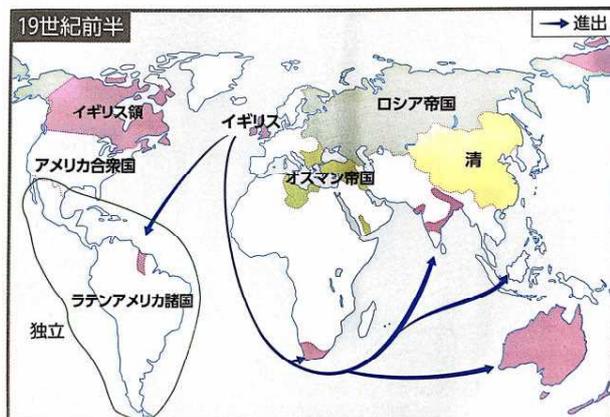
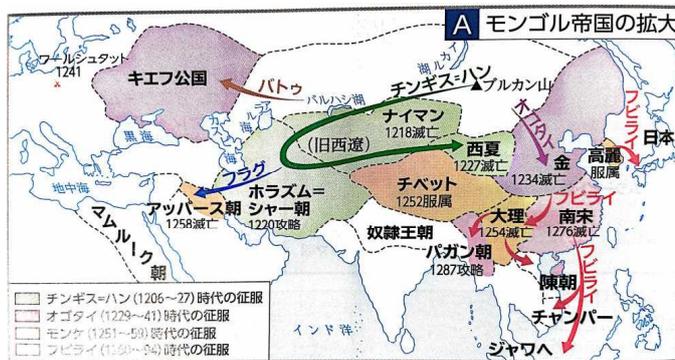
14 ウクライナ問題

ソ連崩壊後独立したウクライナは、天然ガスなどのエネルギー供給をロシアに依存し、構造改革も遅れ経済は停滞している。1954年にロシアより編入されたクリミア半島には、ロシア系住民が多く暮らしており、ロシア海軍の黒海艦隊の基地もある。2014年、親欧米政権が樹立されたウクライナの政変が起きると、クリミアがロシア人の手から離れるのを恐れたロシアは軍事介入し、クリミアを「併合」してウクライナ危機が勃発した。ウクライナ東部では親露派が武装蜂起し、ウクライナ軍との衝突が続いている。国際社会はクリミアの「併合」を認めていないが、2015年、ロシア中央銀行はクリミア半島を描いた新紙幣を発行するなど、実効支配を強めている。



2 世界史関係資料より (世界史図表 第一学習社)

1 3世紀頃



↓①**クリミア戦争** フランスのナポレオン3世が、聖地イェルサレムにおけるカトリックの特権をオスマン帝国に認めさせると、ロシア皇帝ニコライ1世が異議を唱え、ギリシア正教徒の保護を名目にオスマン帝国と開戦した。ロシアの敗戦で、ウィーン体制の要であった同国の威信は低下し、ヨーロッパ情勢は不安定化した。敗戦はまた、ロシアの後進性を明らかにし、同国の国内改革の契機となった。



チェック

クリミア戦争前後の国際体制の変化

●戦前

- ・列強体制(列強の協議による勢力均衡と平和の維持)
- ・体制の中心はオーストリアとロシア(ヨーロッパの憲兵)の連携



●クリミア戦争

オーストリア中立, ロシア敗北
→両国の連携が崩れる



●戦後

ロシアをはじめ各国が国内問題の解決に集中(=列強体制の弛緩)
→国家統一を目指す戦争や紛争が多発(ドイツやイタリアなど)

歴史のスパイス

ヴォルガ川下流域やカス